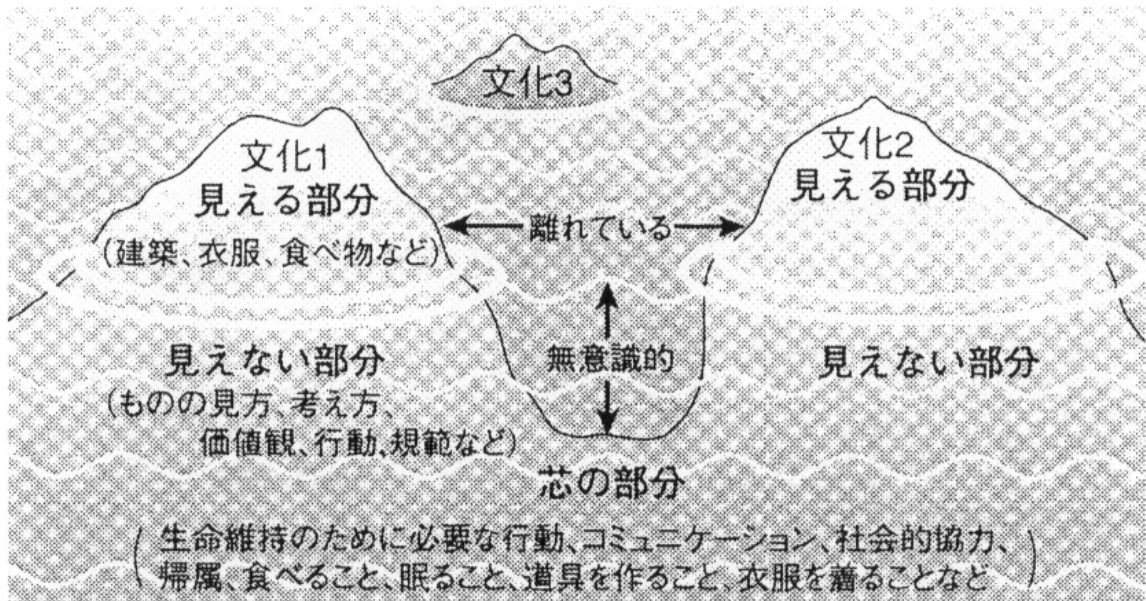


「文化やコミュニケーションの視点から障害を考える 障害、当事者、障害者のきょうだい」

北海道障害学会 2009.1.22 於: はこだて未来大学

河村 真千子

1. 文化とは



(八代京子・町恵理子・小池浩子・磯貝友子 『異文化トレーニング』 1998 p.19 より)

2. 価値観

- ・集団主義 - 個人主義
- ・権威主義 - 平等主義
- ・結果重視 - プロセス重視
- ・リスクを避ける リスクを避けない
- ・短期志向 長期志向
- ・過去思考 現在思考 - 未来志向

3. 言語コミュニケーション

- ・らせんの 直線的
- ・飛び石的 石畳的
- ・人間関係重視 情報重視

- ・発音とテンポ
- ・ターンテーキング

4. 非言語コミュニケーション

- ・身体動作: ジェスチャー、体の動き、姿勢、表情、眼の動き
 - ・身体特徴: 魅力、体臭・口臭、頭髪、皮膚の色
 - ・空間の使い方: 対人距離、縄張り
 - ・接触行動: 撫でる、たたく、抱く、握手
 - ・準言語: 音声の特徴、感情や体調からでる音、間の取り方
 - ・人工品: 衣服、かつら、化粧品、持ち物、香水
 - ・環境要素: 建物、室内装飾や照明、色、温度、音
 - ・時間の使い方: 物事の同時進行性、優先順位
- etc...

5. 心のプロセス(思考・感情・動機づけ……)

- ・各々の集団がその歴史の流れの中で蓄え、作り出してきた社会・文化的プロセスの一部として理解
- ・人がそこにある文化的慣習や集合的意味の体系に沿って反応し、その枠組の中で行動することを通して作り出される
- ・一旦プロセスが作り上げられると、プロセスを作り出す際に関わった文化的慣習や意味体系そのものを維持、変容

6. 心と文化

- ・心
文化に関与することを通して形成
- ・文化
心の社会的、集合的活動により維持・変容されることにより、将来へと受け継がれる
人の主体を作り上げている様々な心のプロセス = 人が社会的、集合的場に関わることで作り上げられる

7. 当事者性と文化の視点で障害を考えることについて

当事者性と文化の視点で障害を考える時、発表者の背景には、第一に、コミュニケーション、異文化間コミュニケーションを専門とし、文化が人間に作用する影響に関心をもっていることである。加えて、文化と障害の関係についての知見である。例えば、生物学的、遺伝的疾患であると考えられることの多い精神分裂病なども、生起、回復、再発が異なることが示されている (Kleinman,

1988)。境界性人格障害に関係した「境界線」の問題は、一定の境界に含まれる事物が、必然的に文化によって規定されることから生じる問題であると論じられている(エドワード・T・ホール 1993)。さらには、文化的に共有された思想や思考の具体化した慣習により、心理的疾患の多くは形成され構築されると指摘されている(Jenkins, 1994)。つまり、文化が作用し障害が作られるということに関心をもっていることである。

第二には、ある文化や社会を理解するためには、その人々の日常生活を理解することが不可欠であるということが関係している。自分の文化を研究対象とする者は、研究対象とする文化に属するか否かということによって大きく異なることが指摘される(大貫, 1985)。細かい日常生活の知識というものは、外部の者にはなかなか把握しがたいが、外部の者には自明のことではないからである。耳の聞こえない親をもつ聞こえる子どもであるプレストン(2003)は、聞こえない親をもつ聞こえる子どもを対象として、ろう文化と聴文化についての研究をおこなった中で、研究調査の過程において、自身が単なる研究者であるということよりは、研究対象者と同様の立場ではない他の研究者が見ることができない、心で感じるものがあったことについて論じている。内部の人間がおこなう研究の信憑性や有効性を疑われることはあるが、問題を解く鍵は研究者と研究対象者が共有する経験であると説明している。当事者性ということが非常に意味をもつということである。

発表者は、障害者問題における広義の意味での当事者、障害のある人の「きょうだい」であり、「きょうだい」の研究を進めている。しかし、「障害者のきょうだい」と十把一絡げにすることはナンセンスであると思っている。同様に、障害を文化的に研究するにあたり、身体あるいは知的に障害のある人とない人という、身体的特徴によってのみ障害を文化的に議論するのではなく、思考や心のプロセスの次元で文化を考えたいと思っている。つまりは、文化、異文化、多文化、コミュニケーションという視点から研究することによって、障害は文化だ！障害は個性だ！と、あたかも障害者を尊重しているかのように見せて排除する議論ではなく、今まで見えなかったことが見えてくるような、社会の様相を把握することであると思っている。そうした視点にたったとき、「障害」が障害者に特化したものではなく、社会問題であり、一見関係ないかのように思える社会のマジョリティである多くの非障害者も、障害者問題における当事者であるということを社会に問いていくことができるのではないかと考えている。

参考文献

- Hall, Edward T (1976) *Beyond Culture*. New York: Doubleday.
- Jenkins, J. H. (1994) Culture, emotion, and psychopathology. In S. Kitayama & H. R. Markus (Eds.), *Emotion and culture: Empirical studies of mutual influence*, (pp.307-335). Washington D. C.: American Psychological Association.
- 北山忍(1998)『自己と感情:文化心理学による問いかけ』共立出版。
- Kleinman, A. (1988) *Rethinking psychiatry: From cultural category to personal experience*. New York: Free Press.
- 大貫恵美子(1985)『日本人の病気観 - 象徴人類的考察 -』岩波書店。

プレストン, P(2003)『聞こえない親をもつ聞こえる子どもたち - ろう文化と聴文化の間に生きる人々』
(澁谷智子・井上朝日訳)現代書館。
八代京子・町恵理子・小池浩子・磯貝友子(1998)『異文化トレーニング』三修社。